

雪国の植物 ユキツバキ 34

佐渡島におけるユキツバキと暖温帯植物の共存

石 沢 進

ユキツバキとヒノキアスナロが共存している所を佐渡島で確認したと中川清太郎氏から連絡をいただいた。その現場に訪れて見たいと思っていたところ、同氏から案内していただく機会に恵まれた。その現地確認とその際に観察できたユキツバキと暖温帯植物の共存について記録する。

ユキツバキは、北陸地方の多雪地方に分布している代表的な植物であるが、それと共存している植物、特にユキツバキの分布限界地や特異な立地で共存している植物に関心を持っている。分布限界地や特異な立地では、ユキツバキが広く分布する地域で見られない植物と共存していることがある。これまで、越後では岩地など特異な立地に生育しているヒノキアスナロとの共存（本誌13号*）、分布上限地での植生（本誌20号**）について記録している。今回はユキツバキが隔離分布している佐渡島における共存植物の一端を掲載する。

* 雪国の植物 ユキツバキ 6

県内稀産のヒノキアスナロと共存 13号（1993）：14

～16.

** 雪国の植物 ユキツバキ 12

ユキツバキの分布上限地域の植物一名立町不動山の場合 20号（1996）：13.

佐渡島の小佐渡大野地区では、前記のようにヒノキアスナロとユキツバキが共存し、加えてそれらの生育地周辺では、暖温帯の植物が同所的に生育している。以下ここで共存している種について以下に報告する。

ヒノキアスナロ：越後の生育地は、東蒲原郡阿賀町の袴腰山で岩が露出している急峻な山体下部の急斜面に生えている。小佐渡では、特に急斜面でなく、腐葉土の堆積している斜面にも本種が生育し、特異な立地であると考え難いが、ユキツバキと葉を接して生育している（写真1・2）。

オオバノハチジョウシダ：越後では、内陸にも分布しているが、ユキツバキと共存している現場を確認していない。佐渡ではユキツバキと隣接して生育している（写真3）。



写真1 ヒノキアスナロ



写真2 ヒノキアスナロ



写真3 オオバノハチジョウシダ



写真4 キヨスミヒメワラビ



写真5 ヒロハノヤブソテツ



写真6 イワヤシダ



写真7 ヒロハノヤブソテツ・オオクジャクシダとの混生



写真8 ヒノキアスナロ

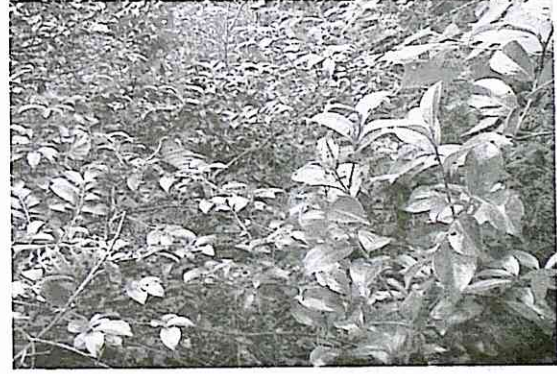


写真9 キヨスミヒメワラビ



写真10 シラキ



写真11 シラキ (幹)



写真12 ウスヒメワラビ

キヨシミヒメワラビ：越後でも稀に見られるシダで、スギ林の下などに生育しているが、個体数は少ない。佐渡では中川氏の生育確認地であり、島内に広く生育していないが、ここではユキツバキと共存している（写真4）。

ヒロハノヤブソテツ：越後では極く稀であるが、佐渡では大佐渡・小佐渡に点在し、ここではユキツバキの根元に生育している（写真5・7）。

イワヤシダ：越後でも稀に見られるシダで、スギ林の下などに生育しているが、個体数は少ない。佐渡では中川氏が生育を確認した所であり、個体数も多く見られるが、島内では稀な種である。ここではユキツバキと共存している（写真6）。

クマワラビ：越後では低地にやや広く分布しているが、ユキツバキと共存している例を見ていない。ここ小佐渡ではユキツバキの群落の下層に生えている（写真8）。

ヒサカキ：本種は越後でも内陸低所に広く分布し、ユキツバキとも稀に共存している。ここ小佐渡でも同所的に生えている（写真9）。

シラキ：越後では海岸沿いの山地に分布しているが、ユキツバキとは分布を異にしている。佐渡では、大佐渡・小佐渡に広く分布し、ここではユキツバキと共存している（写真10・11）。

その他：ウスヒメワラビ（写真12）は、ユキツバキの群落内の構成種ではないが、ユキツバキ群落の近くに生育している。

上記のようにヒノキアスナロと多くの暖温帯の植物が、ユキツバキと同所的に生育し、生態学上から興味深い地域であり、佐渡島の多様な生態系の一つ（新潟県のすぐれた自然）であると見られる。人為的に改変されないように保護しておきたいものである。

クズの白花

中川清太郎

佐渡相川の入川で、クズの群落の中に白花を見つけた（2007年8月22日）。シロバナクズであり、その学名は *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi form. *leucostachya* (Honda) Okuyama である。新潟県では、これまでに記録がないので、新発見と思われる。

佐渡市高千（千本・せんぼ）地内の集落背後の海岸段丘斜面上部に生育。

標高35m付近 西向風衝地。群落 2~3m × 10m 以上。

普通種と混生し、白花品だけの部分もある。風衝地のため葉が密生し根元の様子など不詳、花房はその下にあり、100~150房位であろうか。花色以外は普通種との差異は見当たらない。旗弁の中央部が鮮黄色であることは、普通種と同様で花の白さを一段と引き立たせている。

平素より、一度現物を見たいと願っていた白花品との出会いとその美しさは心ときめくものがあった（2007 8 22）。

〔シロバナクズの学名について〕

クズの白花については、本田正次氏が1931年に植物学雑誌45巻470頁に *Pueraria triloba* Makino var. *leucostachya* Honda シロバナクズとして命名している。また同書494頁に相模根府川で向坂道治氏の採集品により名付けたことを解説している。

その後、本田正次（1939）：「日本植物名彙」の中に

Pueraria thundergiana Benth var. *leucostachya* Honda シロバナクズ、トキイロクズとも記録している。しかし、本田正次（1957）：「改訂日本植物名彙」の中に *Pueraria lobata* Ohwi form. *leucostachya* Okuyama シロバナクズと改訂されている。

